様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　６ 月 ２０ 日現在

機関番号：３３９０８
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2021
課題番号：１７Ｋ０４３７８

研究課題名（和文）「親子が離れて過ごすこと」に着目した児童期の子どもの自立に関する長期縦断研究

研究課題名（英文）A longitudinal study on children's independence in middle childhood focusing on "parents and children spending time apart"

研究代表者
小島　康生（Kojima, Yasuo）

中京大学・心理学部・教授

研究者番号：４０３２２１６９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,000,000円

研究成果の概要（和文）：2013年10月に追跡を開始した約150組の家庭を対象に，（1）子どもを家に置いて親が外出した（留守番），（2）外出先で親子が別行動をとった，（3）家を起点にして親の同伴なしに子どもだけで外出した，の3つのエピソードを，半年ごとに連続5日間，記録してもらった。また，このうち20家庭に対しては，同じタイミングで家庭訪問を実施し，子どもに対し，日常どのような場所で遊ぶかを，家と学校を含む地図を描いてもらいながらインタビューした。発達の順序としては，先の（2）が比較的早くから行われ，続いて（3）→（1）の順に進んでいくことがわかった。

研究成果の学術的意義や社会的意義
親子関係の発達は，発達心理学の分野において主要なテーマの一つだが，従来は，親子がどう関わりあうか，その相互作用の様態に着目したものが多かった。これに対し，本研究では，親と子がどのように離れ，またどのタイミングで合流するか，「離れる―合流する」の繰り返しと変化の解明を通して，親子関係の発達を捉えなおそうと考えた。成果として，外出先で親子が一時的に離れることが最も初期からみられ，そののち子どもが親の同伴なしに外出する，最後に，子どもを家に置いて親が外出する，が見られることが分かった。以上の成果は，子どもの自立のプロセスモデルを提示したという意味で，社会的にも意義のある研究成果をもたらしたと考える。

研究成果の概要（英文）：For approximately 150 families, for whom we had begun following up in October 2013, three types of episodes were recorded for 5 consecutive days every 6 months: (1) parents leaving their children at home (rusuban), (2) parents and children spending apart from each other while out and about, and (3) children going out alone without being accompanied by parents. In addition, home visits were made to 20 of the families at the identical time, and the children were interviewed about where they played on a daily basis while being asked to draw a map that included their home and school. It was found that the developmental sequence was (2) relatively early, followed by (3), and then (1).

研究分野：発達心理学

キーワード：子ども　自立　親子　離れて過ごす　日誌法　インタビュー　縦断研究

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

発達心理学の分野において親子関係をテーマとする研究は膨大にある。しかしその大半は，親子が互いに向きあい，どう関わりあうか，つまりその相互作用の様態や個人差，また発達変化に着目したものであった。親子は常時一緒にいて関わり続けているわけではなく，一日一日のスパンで考えると，子どもが乳児期であってさえ，昼寝中は一時的に離れたり，また別の大人（例えば祖父母）に預けて親が外出したり，といったことがある。幼稚園への入園，習い事の開始，さらに小学校への入学以降は，親子が離れて過ごす時間が数時間にも及ぶ。このように考えると，「離れる―合流する」の繰り返しと蓄積こそが，親子関係の本来の実態であり，その発達変化を描くことが，親子関係の新たな一面を捉えることにつながるとみることができよう。

２．研究の目的

親子間の「離れる―合流する」が一日の間にどのくらい生起しているのか，また離れ方，合流の仕方にはどのようなバリエーションがあり，子どもの年齢の上昇と共に，その頻度はどのように変化していくのか。その実態を解明し，時間の経過に伴う変化を見ることにより，親子関係の発達，さらには子どもの親からの自立，親の子どもからの自立のプロセスを明らかにすることが本研究の目的であった。

３．研究の方法

小学校 2 年生，3 年生，4 年生がいる家庭，それぞれ約 50 組に協力を依頼し，(1) 子どもを家に置いて親が外出する，(2) 外出先で親子が一時的に離れて過ごす，(3) 子どもが親の同伴なしに外出する，の 3 つの文脈に着目して，該当するエピソードを連続 5 日間，半年ごとに記録してもらった。一部の家庭に対しては家庭訪問も実施し，子どもの屋外での活動に関するインタビューも行った。

４．研究成果

図 1～3 は，上記の（1）～（3）の頻度の推移を示したものである。(1) すなわち子どもを家に置いて親が外出したエピソードと，(3) すなわち子どもだけでの外出のエピソードは，学年の上昇と共に頻度が増していくことが分かった。一方，(2) の外出先での親子の別行動のエピソードは小学校低学年ごろにかけて増加し，そののちは徐々に減少していくことが分かった。(2) がＵ字型のカーブを描く理由としては，そもそも親子で外出すること自体が学年の上昇と共に減っていくことが関係しているのではないかと考えられた。

次に，家庭訪問を通じてより詳細な解析を行った約 20 組のデータの分析を行ったところ，(2) が最も早い時期から出現し，次いで小学校低学年で（3）が多くみられるようになり，中学年以降，(1) が増えていくことがみてとれた。(1) ～ (3) 全体を統合し，親子間での「離れる―合流する」が 1 日の間に何回程度繰り返されているかを分析した。その結果，少ない日では 4 回程度，多い日には 13 回にものぼることが分かった。さらに，学年の上昇と共に，「離れる―合流する」がたびたび繰り返されるようになることが分かった。

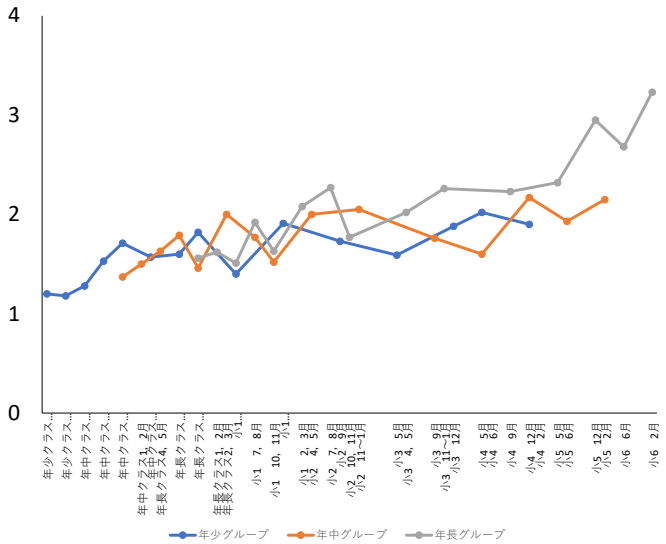

図１　子どもを家に置いて親が外出した頻度

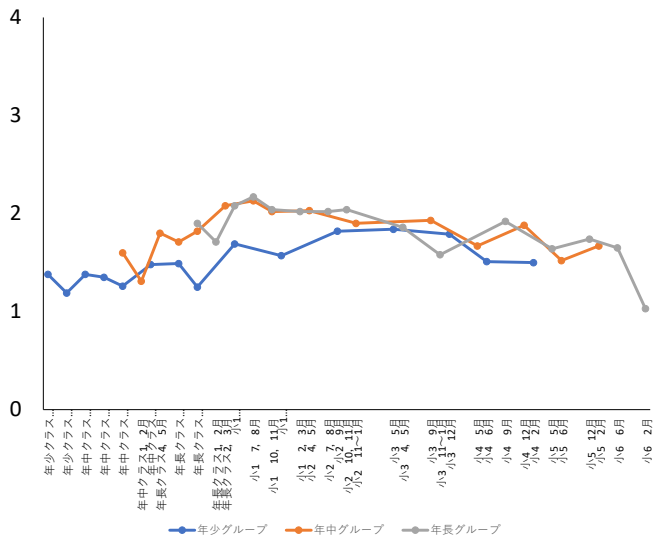

図２　外出先で親子が別行動をした頻度

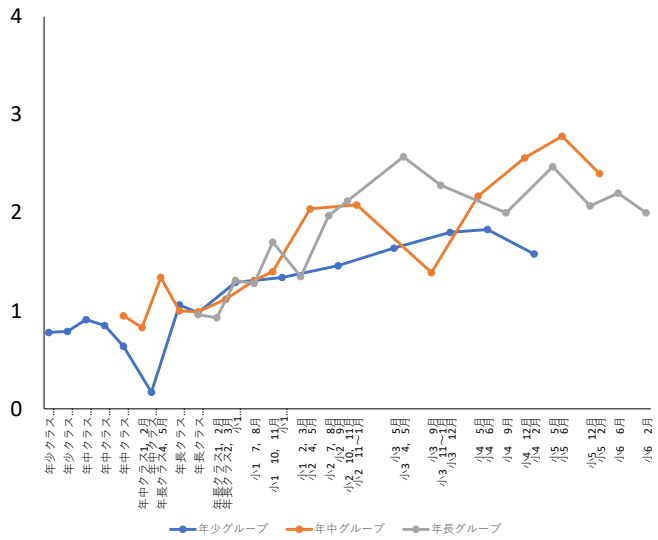

図３　子どもだけで外出した頻度

引用文献
小島康生（2021）「離れる」－「合流する」からみた親子関係の発達　こども環境学研究，17(3)，48-55.

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　2件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 小島康生	４．巻 17
２．論文標題 「離れる」―「合流する」からみた親子関係の発達	５．発行年 2021年
３．雑誌名 こども環境学研究	６．最初と最後の頁 48-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 小島康生	４．巻 15
２．論文標題 就学前の子どもと母親が離れて過ごすことにかかわる要因の検討：出生順位に着目して	５．発行年 2019年
３．雑誌名 こども環境学研究	６．最初と最後の頁 95-102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計2件（うち招待講演　0件／うち国際学会　1件）

１．発表者名 小島康生
２．発表標題 屋外で親子が離れて過ごすことにかかわる要因 －3コホート，3年にわたる縦断的検討－
３．学会等名 日本発達心理学会第30回大会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yasuo Kojima
２．発表標題 Factors related to physical separation between preschool children and their mothers: A Japanese study
３．学会等名 19th European Conference on Developmental Psychology（国際学会）
４．発表年 2019年

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関